

〈研究ノート〉

## 中島飛行機三鷹研究所 ——その建設まで——

高 柳 昌 久

### 1. 本稿の目的

富士重工業東京事業所および国際基督教大学（以下 ICU と略す）キャンパスの前身と言える、中島飛行機三鷹研究所（以下、三鷹研究所と略す）の資料は、終戦時にわずかな例外を残しすべて焼却された。関係者に対する聞き取り調査もほとんどおこなわれなまま長い時を経た結果、その実態の正確な解明は極めて難しい。

筆者は遅ればせながら 2002 年から三鷹研究所についての聞き取り調査を開始した。その成果を生かし、2005 年には共著で一般向けの「戦争遺跡」のガイドブック『戦争の記憶を武蔵野にたずねて』（ぶんしん出版）を出版し、その中で三鷹研究所について概略を述べた。しかし本の性質上、その記述の裏づけを十分に明示することはできなかった。

2006 年には、比較的充実した調査ができた動員学徒の体験をまとめ、本紀要 32 号に研究ノート「中島飛行機三鷹研究所における動員学徒」として掲載した。

以上の経緯を踏まえての本稿の目的は、前回の研究ノートでは言及できなかった証言と資料を紹介しながら三鷹研究所全般について述べることである。今回は紙幅の制約から、三鷹研究所の建設までを扱う。証言は当時の情報統制のため断片的で、さらに長い時を経た結果おぼろげである。資料といっても一次資料は極めて乏しく、信頼性の低い回想記などが多い。しかしそれらを通して浮かび上がってくる三鷹研究所の姿は、ICU キャンパスの地もかつては確実にあの戦争に巻き込まれていたことを示すものであり、この地に関わる者があの戦争に向き合う一助にはなると思われる。

今回も多くの聞き取り調査に依拠したが、後述する三軒家の住民であり、後に三鷹研究所に勤務した川瀬スミ子氏<sup>1)</sup>、中島飛行機で三鷹研究所の用地買収を担当した太田繁一氏<sup>2)</sup>、中島飛行機で三鷹研究所の建築資材の購入を担当した西村忠雄氏<sup>3)</sup>には、特に貴重な情報をご提供いただいた。この3氏をはじめとする聞き取り調査にご協力くださったすべての方々に、深く感謝を申し上げる（以下の記述においては聞き取り調査からの引用を除き、すべての方の敬称は略させていただく）。

### 2. 買収前の地域の状況

#### 2.1. 三軒家

三鷹研究所設立が及ぼした影響を探るためには、中島飛行機が買収を開始する前の土地の

歴史を概観することも必要だろう。

8代将軍徳川吉宗による新田開発奨励のもと、享保年間(1716-1735)に大沢の下原(野川の南)から名主になることを志し、竹内家が現在のICUキャンパスにあたる地に移住した。1736年、大岡越前守のもとで検地がおこなわれ、このあたりを大沢新田と呼んだ。当初は竹内家が2軒、島田家が1軒の計3軒しかなかったため「三軒家(または屋)」とも呼ばれることとなった<sup>4)</sup>。

現在ICUキャンパス内には、マクリーン通り(キャンパスの正門からチャペルへ、東西に伸びる通り)の中ほどにあるロータリーから北西に向かい、湯浅記念館の南を通る小道がある。これがかつての三軒家の中を通る道であった。この道は野川の南にあった大沢の中心部と小金井を結ぶ重要な道であった。現在は美しい並木と見えるケヤキの列は、かつての集落の屋敷林が大きく成長したものである。現在、道と直角にもケヤキやシラカシが列植されていることが観察できる<sup>5)</sup>。

## 2.2. 都市近郊としての変化

### a 墓地・天文台・別荘

三鷹研究所建設以前から、すでに三軒家の周辺にも都市近郊としての変化が生じていた。

1923年、ヨーロッパの墓地公園の考えを東京に導入した最初の試みである多磨霊園が開設された。土地所有者110人から約30万坪が買い上げられた<sup>6)</sup>。

1924年には国立天文台が移転してきた。これにより長久寺、八幡神社が現在地に移転し、15-16軒が立ち退くことになった。後に三鷹研究所の正門が位置することとなる天文台通りはこのとき造られた<sup>7)</sup>。

大正前期から国分寺村・小金井村・三鷹村の、野川沿いの国分寺崖線付近にいくつも別荘が建てられるようになった。ここは崖下に泉がいたるところに湧いていたのでそれを利用して池を造り、斜面に庭園を設け、崖上に建物を建てるものが多かった。崖上から望める富士山や、周囲の武蔵野の自然も魅力だったようだ<sup>8)</sup>。泰山荘(今もICUキャンパス内にその建物の一部が残る)もそのような別荘の1つとして1935年頃に建設された<sup>9)</sup>。

またおそらく1930年代の前半には、別荘としてのコンセプトは泰山荘とは違うが、森山別荘も建てられていた。場所は現在のマクリーン通りの南になる。日本橋で問屋を営んだ森山氏が建てた。母屋は南向きに建てられた純和風の数寄屋造りで、1階の広間は回り廊下まで使えば120名が入った<sup>10)</sup>。

さらに洋画家・富永親徳のアトリエが1936年以前に建てられていた<sup>11)</sup>。

すでに大正末に天文台通り沿いの土地は宅地として細かく区分され、分譲が進んでいた。時期は不明だが志賀直哉の弟の別邸も建てられた<sup>12)</sup>。

## b 鉄道・バス

1917年には多摩鉄道（西武鉄道が1927年に買収して一時「是政線」となり現在「多摩川線」）が一部開業し、1922年に是政まで全通した。この鉄道は土木工事に使う多摩川の砂利を都心に運ぶためのものだった。特に関東大震災以後、鉄筋コンクリートの建物が多く建設されるようになったため需要が増した<sup>13)</sup>。当時調布の多摩川流域には多くの朝鮮人労働者が住み、砂利の採集に従事していた<sup>14)</sup>。

最初は砂利を運ぶだけだったこの鉄道も、やがて機関車が引く砂利を積んだ貨車の後に客車を付けるようになり、さらに客車専用のガソリンカーも走るようになって都心に通勤するサラリーマンにも使われるようになった<sup>15)</sup>。

1932年武蔵野乗合自動車(株)（小田急バス(株)の前身）が創業した。当初の路線は調布から三鷹天文台の前を通過して武蔵境駅に至るものと、調布から吉祥寺駅までの2路線で、15人も乗れば満員になるバスであった。1937年には吉祥寺駅から野崎、野崎から武蔵境駅の2路線が新たに加わった<sup>16)</sup>。

## c 調布飛行場

この地域の人々に戦争の影響を実感させたと思われる出来事が、調布飛行場の建設である。

調布飛行場は、1938年11月、東京府が、関東大震災後の都市計画の一環として計画した。すでに前年の1937年には日中戦争が始まっており、陸軍も、敵機から東京を守るための戦闘機を配備する基地として重視し、この計画を強く推進した。

調布村・三鷹村・多磨村にまたがる約50万坪が用地として選定され、1938年12月には調布尋常高等小学校に関係地主が集められた。関係した地主は310名で、事前には、土地の買い上げ価格、補償料に不満があっても「国家のため、減私奉公の誠を捧げ」調印するよという文章が送付された。そして半年以内に建物、竹木類、墳墓のすべてを移転、伐採、撤去するよという、現在では考えられないほど厳しい条件が示されていた。土地の価格もずいぶん安かったという（場所によって違うが宅地1坪6円、畑1坪3円60銭という例がある）。その後の拡張工事も合わせると、47戸の家屋、寺院4戸、神社2戸が移転することとなった。江戸時代初期からの集落「押立山谷」がなくなり、近藤勇の生家も飛行機の離着陸のじゃまになる、ということで屋敷は取り壊され、立木は切られた。

1939年から工事が始まり、滑走路は幅80mで南北に1,000m、東西に700mの長さのものが2本造られた。工事用の砂利は多摩川で採取され、是政線とそこから分岐する専用の引込み線で運搬された。

工事をおこなう労働者が日中戦争中により非常に不足したので、多数の囚人が使用された。府中刑務所の看守約110名の監督のもと、全国から集められた約1,000名の囚人が刑の重さによって色の違う囚人服を着、場合によっては鎖を付けた姿で、木の根を抜き、整地を

し、排水溝を掘る、といった重労働をおこなった。

1941年4月30日に飛行場は完成した。竣工式には飛行パレードやDC3型機による試乗飛行会などがにぎやかにおこなわれ、「東洋一の民間飛行場」の誕生が関係者や町民によって祝われた。しかしまもなく飛行場は陸軍の管理下に置かれ、軍だけが使用することとなった。当初配置された部隊の中心は、97式戦闘機19機を装備した飛行第144戦隊（後の飛行第244戦隊）だった。以後、調布飛行場は「帝都」防空の最重要拠点となる<sup>17)</sup>。

#### d 中央航空研究所

三鷹から調布にかけて1939年に建設されたのが中央航空研究所である。この研究所は、日中戦争の開始により改めて航空戦力の重要性を認識した政府が、10年以上先の航空機のための高度で総合的な研究をおこなう機関として設立した。敷地の面積は約32万坪であり、30数軒の民家と「聖ジョセフ修練院」が立ち退くこととなった。ここで完成した飛行機は調布飛行場で試験飛行がおこなわれる計画であった<sup>18)</sup>。後に三鷹研究所建設部長となる中島飛行機の佐久間一郎は、1939年10月から中央航空研究所施設委員会委員を務めていた<sup>19)</sup>。

この時の用地買収については、1936年から三鷹村村長を務め1940年から三鷹が町となったため町長を務めた高橋勝義の証言がある。「『あなたの土地をこういう目的で国が買い取るから、印鑑を持って役所に来い。』という通知が来ます。これは一方的な通知です。その明けの日に実印を持っていき、印を押さなかったら今度は国賊扱いですね。それで、中央航空研究所に買収された値段が1坪2円です」<sup>20)</sup>。

#### e 軍需工場

三鷹には下連雀に1933年正田飛行機が設立され、これが三鷹の軍需工場の草分けとなった。1936年正田飛行機の近辺に三鷹航空工業が建設された。1937年には日本無線が同じ地域に移転してきた。1938年武蔵野町に陸軍の発動機を生産する中島飛行機武蔵野製作所が開設された。海軍はそれに対抗し、その隣に1941年海軍の発動機を生産する中島飛行機多摩製作所を開設させた。その後も三鷹には日本無線の下請け工場や中島飛行機の2つの製作所の下請け工場などが次々と建設された。正田飛行機も三鷹航空工業も中島飛行機に発動機の部品を供給することになる。1927年には三鷹の工場数は1だったが、1939年には21となった。それに伴い1935年には11,810人だった三鷹の人口は1940年には24,247人に急増し、その後も増加し続けた<sup>21)</sup>。

この頃多摩・武蔵野地域には次々と軍需工場、特に軍用機に関係する工場が建設されていた。理由としては、すでに京浜工業地帯一帯は鉄鋼業などが展開していたので、新興産業である飛行機産業は、農業生産力が低いため地価が安くなおかつ平坦な地形のこの地域に進出したこと、この地域はすでに鉄道が発達しており、資材の供給にも労働者の通勤にも適して

いたことが挙げられる。そして中島飛行機のような大工場ができれば中小の下請けの工場もその周辺に集まってくることとなった<sup>22)</sup>。

三鷹町町長・高橋勝義は三鷹に軍需工場が集まってきた理由として、空気がいいことが職工の衛生上良いこと、まだ工場建設が可能な土地が広がっていたことをあげている。さらに高橋勝義は、中島飛行機の創設者・中島知久平が武蔵野の中島飛行機の工場を中心に武蔵野・三鷹・小金井・保谷・田無に軍需工場地帯をつくる構想をもっており、当時中島飛行機武蔵野製作所所長だった佐久間一郎が三鷹村役場をよく訪れた、とも語っている<sup>23)</sup>。

### 2.3. 元三軒家住民からの聞き取り調査

#### a 地図に沿って

中島飛行機による買収直前の三軒家とその周辺の状況について、1937年から1939年に測図・修正した地形図<sup>24)</sup>を参照しながら、当時この地に在住していた川瀬スミ子とその妹である須藤喜美子・小森英子から聞き取り調査を行った<sup>25)</sup>。

1. 井上酒店はすでにあり、コップ酒を売っていて近所の農家の人が飲んでいた。
2. 屠場があった<sup>26)</sup>。
3. 志賀直哉の弟の別宅。ちょっと森山別荘に似た家だった。志賀直哉の小説を読んでいたので表札を見に行った。
4. 竹内鉄之助さん（竹内千代之助さんの弟）宅。その娘が愛子さん。
5. 島田さん宅。所有する栗林では、都心の人達がバスに乗ってやってきて栗拾いをするツアーがおこなわれていた。
6. 森山別荘は私（川瀬スミ子）が物心ついたころからあった。当初は母屋の玄関は南向きだった。門を入ってすぐのところに管理人のための洒落た平屋の、広い板の間のある洋館があった。管理人は老夫婦だった。老夫婦が来る前に留守番をしていた人に、森山別荘にあった蓄音機を聴かせてもらったことがある。掃除を自分の祖父が手伝っていた。森山さんには私と1つ違いぐらいのお嬢さんがいて、祖父はその服や帽子をもらってきた。祖父が「森山さんの娘さんはおまえと同じ年なのに、横抱きに抱かれて車から降ろされていた」と驚いて話していたことがあった。
7. 竹内秀吉さん宅<sup>27)</sup>。自分たちはここで生まれ育った。今も敷地の西側の屋敷林であった三軒家の道と直角の、シラカシの列が残る。母屋の2階は蚕小屋だった。納屋や物置もあった。1町ほどの畑を耕していたが半分は小作地だった。麦・陸稲・サツマイモ・すいか・うり・里芋などを作っていた。秀吉さんは大工も兼業していた。
8. 竹内勝義さん（竹内秀吉家の本家となる）宅。お蚕小屋もあった。
9. 竹内梅吉さん宅。



新小金井駅

野関南

連雀通り

深大寺

西武  
鉄道

笠守稲荷

野梶南

日本特殊塗料工場

14.

13.?

1.

このあたりに  
稲荷

西野交差点

2.

天文台通り

多摩川

三軒家

11.

9.

7.

5.

3.

12.

11.

10.

8.

6.

4.

青龍権現

大沢交差点

見街道

犬澤受信研究所

龍源寺

相善清橋

上坂

上石原

原

10. 竹内千代之助さん（その息子が幸吉さん）宅。この辺りを開拓した家。母屋は大きく、かんなを使っていない明治より前に造られた古い家だった。田畑も三軒家の他の家は2-3町のところ、10町ほど持っていた。竹内秀吉家もここから畑を借りて小作していた。屋敷には4人が手をつないでやっと囲めるほどの太い樫があったが切られてしまった。
11. 新川久兵衛さん宅。
12. 画家の富永さん宅。三角屋根の立派な洋館で、覗いてみると2階まである天井の高いアトリエがあって、大きな絵が置いてあった。  
地図のどの家にあたるのかははっきりしないが、この近くに七面鳥を飼っている家があり、珍しかったので垣根の外から眺めていた。
- 13.・14. 町から来た人達が住んでいた。  
その他に、連雀通りに面したあたりに、タバコ屋さんがあった。  
また大沢の八幡様の道を真直ぐに行くと、二枚橋のすぐ近くにお稲荷さんがあり<sup>28)</sup> 遠くからも拝みにくる人がいた。

## b 三軒家の人々の暮らし

川瀬スミ子・須藤喜美子・小森英子からの聞き取り調査より

働くことだけを考えていたような人たちだった。外から来た人のことは「来たりもん」と呼んだ。都会から来た人たちの生活の仕方のことを「ブンカツ」といった。「文化生活」の略だったと思う。

三軒家の家の風呂は横に窯と煙突が付いている木の桶で玄関に置かれ、客が来ると出るに不出れずということになってしまった。

今でも三軒家のあったあたりには1mほどのこんもりした握りこぶし大の石が含まれた土盛りが見られる。これは「石塚」といって長年にわたって井戸を掘ったり、掘りなおしの時出た土を積み上げたもの。「石塚で遊ぼう」などと子供の遊び場だった。

学校に通うときは権現様<sup>29)</sup>の前に集合した。雪が降ると膝まで雪に埋もれた。大人が雪かきしてくれた。

夜は鼻をつままれてもわからないほど暗かった。

三軒家だけの組合（町会）があり、冠婚葬祭用にお膳などを共同で買って使用するなど団結が強かった。秋祭りは権現様でおこなった。竹内家のお墓は長久寺。

竹内の家はどこもお稲荷さんを祭っていた。家を守ったり商売を繁盛させてくれるのだが、大切にしないとたたりがあつて病人が出たりするという。お赤飯や飴をあげたりした。2月の初午の日に赤白青の半紙を糊で張り合わせて長くした紙に、子供が毛筆で字を書いた。竹内秀吉家は「奉納穴守稲荷大明神」と書いた。羽田飛行場の中に今でもあるお稲荷さんから、祖父がご神体をもらってきた。社は大工だった父が自分でつくっ

た。他の竹内家は「稲荷大明神」<sup>30)</sup>。

大沢から武蔵境に行くバスの本数は1時間に1本ほどだった。

なお、三鷹市がおこなった民俗学の調査によれば、この地域では神社の屋根を葺く萱の採集が行われた。またこの地域の林に子を形式的に「捨てる」儀式もおこなわれた<sup>31)</sup>。

### 3. 三鷹研究所の設立

#### 3.1. 三鷹研究所の目的

##### a 中島飛行機の開発部門の統合

三鷹研究所が設立された目的は、当時、群馬県の太田に置かれた陸軍の機体開発部門、群馬県の小泉に置かれた海軍の機体開発部門、東京の荻窪に置かれた陸海軍の発動機開発部門とに分散していた中島飛行機の技術者を1か所に集め、技術的な横の連絡を緊密にすることだった。これにより種類が増加してきた飛行機の設計・管理の能率を向上させようとした<sup>32)</sup>。

しかし結局、中島飛行機の海軍機体開発部門は三鷹研究所には移転しなかった。その理由は陸海軍の争いが原因ともされるが異論もあり、はっきりしない<sup>33)</sup>。

##### b 総合研究所の構想

三鷹研究所の用地買収にあたった太田繁一によれば、中島飛行機の創設者・中島知久平自らの、次のような総合研究所の構想があったという。

中島知久平先生は、三鷹研究所を、航空機を含む先進技術全般の研究開発はもとより、政友会総裁や第1次近衛文麿内閣の鉄道大臣を務めた政治家としての関心から、政治・経済・社会など国家経営に資する研究をもおこなう総合研究所にしようという計画を持っていた。世界から各分野の優れた学者を招聘するつもりだった。

中島知久平先生はこの研究所設立について非常に熱意をもっていた。私は土地買収に際し当初から中島喜代一（中島知久平の弟）社長に、大社長（中島知久平のこと）の構想にしたがってやるから直接指示を受けるように言われた。中島知久平先生は政友会の総裁で非常に忙しい時期だったのだが、月に1度は用地買収の進捗について視察に見えた。「自分は飛行機から手を引いて政治に専念しておるけれども、この研究所に関する限りは俺が口を出すから、そのつもりでいてくれ」とのことだった。敷地を歩きながら研究所の構想を練っておられたのだろう。

最初、敷地の面積が62万坪と聞いて、一研究所の面積にしては1桁多いのではないかと思った。しかし視察に来た中島知久平先生が、世界でも一流の学者を招くのだからそのための宿泊施設を作るつもりだと言ったり、学者や技術者が頭を休めたり構想を練

るために、美しい景色を眺めながら散策するための林を残すよう言ったり、日比谷公園ほどもある面積をお花畑に指定したりするのを聞いて、これではいくら土地があっても足りないはずだと納得した。中島知久平先生の構想には常人の計り知れないスケールの大きなところがあった。

このような目的のため、中島知久平先生は「松の木を1本も切るな。どうしても工事の都合で伐らざるをえない場合は移植せよ。」と言ったこともあった<sup>34)</sup>。ある程度大きくなった松は移植するとすぐ枯れるというのが定説なのでそれを言うと、「横浜の坂田種苗店にあるドイツから輸入した薬を注射すれば大丈夫だ」と言うので半信半疑でそこに行ってみると随分高価なものだったがほんとうにあったので、忙しい人がどうしてそんなことまで知っているのかとびっくりした。

しかし軍の意向もあり、この総合研究所としての計画は挫折した。<sup>35)</sup>

### c 研究所の敷地として三鷹が選定された理由

太田繁一からの聞き取り調査より

まず建設中だった「東洋一」と言われた調布飛行場に隣接する地であることがあげられる。専用道路を作れば試作した飛行機の試験飛行がすぐできるという利点があった。

次に富士山が見え清流が流れ、名士の別荘地として選ばれるほど景色の良いところであり、中島知久平先生の総合研究所の構想には好適だった。

近隣の中島飛行機の諸製作所（荻窪の東京製作所、武蔵野の武蔵野製作所・多摩製作所、中島航空金属(株)田無工場）との交通の便も良かった<sup>36)</sup>。

前述の高橋勝義が語った「中島知久平の中島飛行機武蔵工場を中心とする武蔵野・三鷹・小金井・保谷・田無に軍需工場地帯をつくる構想」も背景にあったのだろう。

### d 敷地の面積・範囲

三鷹研究所の敷地は約60万坪とされる<sup>37)</sup>。富士重工業東京事業所の面積が約5万坪であり<sup>38)</sup>、設立当初のICUキャンパスが約46万4,000坪である<sup>39)</sup>。しかしこの2つを合計しても約60万坪には達せず、敷地の正確な面積と境界は不明である。新小金井駅から現在のICU高校北端に至る当時存在した引込み線の南側の土地、調布飛行場に至る誘導路、東野住宅などの社宅用の飛地などを合計すると帳簿上、約60万坪に達したということだろう。地鎮祭後も敷地は拡張されたい<sup>40)</sup>。

## 3.2. 敷地の買収

### a 中島飛行機の担当者の証言

太田繁一からの聞き取り調査より

私が入社した当時は航空戦力が重視され、中島飛行機は毎年倍のペースで大きくなっていく時期だった。最初のころは法律的に重要な仕事だと言うことで土地登記の仕事を担当させられたが、実際には至って事務的、定型的なことが多く、簡単で、つまらないと武蔵野製作所所長であった佐久間一郎に言ったら、「そんな生意気なことを言うなら土地の買収をやれ、たいへんだぞ」と言われて土地買収を担当することとなった。

それが縁で中島知久平先生にもお目にかかることになった。私たちににとっては雲の上のような人で最初にお会いしたときには緊張して足が震えた。しかし非常にやさしい態度で接してくださったので、その後は仕事が変わるたびにご報告して指導していただくことになった。

三鷹研究所の買収を始めたのは1940年の晩春だった。入社後2年経過し28歳になっていたが、その直前社長秘書を命じられ工場から本社に転勤していた。秘書就任後間もなく中島喜代一社長から予め線引きしてあった陸軍参謀本部の大きな地図を示され、線内の土地をできるだけ早急に買収するよう命じられた。社長秘書の肩書きはそのままこの仕事に専念することになった。部下として、元登記所の職員や司法書士など2人をつけてくれたので、3人でこの仕事をするようになった。社長から小切手帳を渡され、買収がある程度まとまったら金額を記入して持参するように言われた。

武蔵野製作所の監督官（軍需工場などに駐在し、その監督にあたった軍人）が「三鷹は小作争議も多く、近藤勇の出たような気の荒いところだからついていってやろうか」と言ってくれたが、サーベルで脅して土地を買収したということになると後々問題になるので、「国家のためにやるんだから説明すればわかってもらえるはずだ、どうしても困ったときには力をお借りしたいが当面1人で行く」と言って断った。

登記所で地主を調べたが3百数十人いた。天文台通り沿いの土地が住宅地として分譲されておりその地主が多かったのでこれだけの人数となっていた。この人数を1か所に集めるため三鷹町の高橋町長のところに飛び込んで、町議会の議事堂を貸してもらった。集まった人を前に初めて土地買収の計画を発表した。どんな声が飛び出すかと緊張したが、集まった人々は「よくわかりました」と協力的だった。高橋町長も「国策に沿うことだからみなさん協力してくれ」と言ってくれた。日米戦争も必至と言われ、軍は航空戦力の充実を図っていたころだった。当時は国策に従わなければという空気だった。仕事は気持ちよく進めることができ、罵声をあびるということは全くなかった。

1人1人の地主と値段の交渉をしていたら大変なので、主だった地主に委員会を作ってもらい、こちらからだいたいの相場を提示してから、その委員会にいろんな種類の土地（宅地か農地か林か。農地なら作物の植え付けの時期によって値段が違う）、立木などの値段の基準をこちらとも話し合ってもらった。当時の民間の相場にだいたい従ってやったので恨みを買うことはなかったと思う。

その後1人1人の地主と交渉して買収していった。当時森山別荘の持ち主だった森

山さんは書画骨董が趣味で、ここには恒温恒湿の土蔵があり、毎週来てはそこから愛蔵品を出し楽しんでた。最初に買収したこの森山別荘の門番用の建物は、数名の社員の執務室としては適切だったのでそこを仮事務所とした。

道路沿いの宅地が坪20円で高く、栗林が多かった奥の方は5-6円だった。雑木林も多かった。田畑は作物の植え付けの時期によって値段が違う。わさび田は何十円もして高いので驚いた。「大沢わさび」は当時有名だった。きれいな湧き水がないと出来ないし、育成には大変な手間がかかるので高値になった。立木の値段は木の種類と大きさによって異なるが、大きさについては「目どおり」と言って目の高さの幹の周囲の長さで値段を決めた。不動産業者が介在したことはなく、直に持ち主と交渉した。

休日もなく、時には事務所に寝泊りして仕事をした。ある程度まとまったところで本社に行き、地図に色を塗って進捗状況を説明し、社長に小切手帳に印を押してもらう。買収金額については任されていて、社長は何も言わず黙って社長印を押してくれた<sup>4)</sup>。

農民は昼間は農作業をしているから畑で交渉というわけにもいかないで、夜7時8時に訪ねるしかない。そして一度主人が承諾しても次の晩には「おばあちゃんに話したら先祖伝来の土地を手離すことはできないとって……」と印を押してもらえず、何回も通わなければならない場合もあった。「お国のためだから」とさっと売ってくれた人もいたが、そんなわけで時間がかかった。

農民の中には、仕事は農業しかできないからということで代替地を要求する人もいた。保谷村の村会議員で武蔵野製作所建設の時も世話になった村の有力者や、武蔵野町の収入役をしていた素封家といった地元の有力者の助けを借りて代替地を用意した。農民は土地がなくては生きていけないので、これにはずいぶん力を入れた。

天文台通り沿いの土地は宅地として分譲されていたので地主がたくさんおり、しかも都内にばらばらに住んでいた。その人達を1軒1軒訪ねていくのに苦労した。スピーディーに進めるために当時中島飛行機では社長・副社長・所長・軍の監督官しか使えなかった自動車を、借り上げ車だったが専用に使えるようにしてくれた。それでも非常に時間がかかった。

中島知久平先生が時々視察にきた。買収が予定より遅れていることを説明して詫びても中島知久平先生はすこしも怒らず、「来年の今ごろになればできるかね」などという。それでますます恐縮して本当に寝食を忘れてがんばった。

泰山荘の主人だった山田敬亮とも交渉した。実業界の大先輩であり緊張した。山田敬亮はすでに病気でおやすみになっておられたが、枕許に通され鄭重にお願いしたところ快くご承諾くださった。志賀直哉の関係者の別宅も買収した。

1年半ぐらいの間に土地買収をだいたい終えて、地鎮祭となった。ただし地鎮祭の時にもまだ地主が承諾せず、買収ができていない所もあった。しかしすべて買収が終わるのを、もう待つてはいられないということだった。

## b 土地を提供した住民側の証言

三軒家の中では大きな地主であった竹内幸助・キヨからの聞き書き

代々三軒屋に住み、10町近く土地を持っていた。……ここに中島飛行機の工場や研究所を建てるからと言う話を聞いた時は、いやだったねえ。国が軍か知らないけど、勝手に決めて地主に対し入れ替わり立ち替わりいろいろな人が来て、話をまとめようとしていた。うちは売らないと決めた。そのうち大地主の藤棚<sup>42)</sup>あたりの契約を済ませ、今度は小さい地主をせめて契約していった。あちこち虫が喰った様を買収されて行き、町役場から呼び出されるのが何度もあった。逃げまわったよ。4年間がんばったけど、とうとう19年に今の場所に移った。ほんの少しの代替地だった。

なぜ移って来たかと言うと、契約も話もないのに引き込み線を畑に作ってしまったり、格納庫や本館の建設が始まってしまった。ここは新川さんの畑だった。地鎮祭は勝よしさんのところでやった。うちの土地は、坪5銭で借り上げられることになった<sup>43)</sup>。

肥料もないのに、代替の畑で作物ができる訳がない。供出の割当にサツマ芋や麦などを出したが、バケツに少ししか肥料がもらえなかった。<sup>44)</sup>

大沢の元農民・小川友吉からの聞き書き

天文台が土地を買収してそれで大分農家の耕作が少なくなったのと、その次にキリスト教大学ね、今の、そこを中島チクヘイさんが飛行機を造るのでとても莫大な土地を買ってね、買収したんですよ。そこは皆さん売るのをいやがったんですけども、売らない人は非国民だ何だと言われて、それで安く手ばなしてしまっただけです。まあ、私が覚えていて一番打撃っていうのは何でしょうね、昭和15年ころですね、そこの中島飛行機の製作所が土地を買収したのが一番の打撃でしょうね。本当に気の毒な方もいましたよ。あと、今の調布飛行場の中に大沢の人がいたんですけど、その人は全部宅地ぐるみ買収されて、それで点々と散っちゃったんですね。それで運の悪い人は、また移ったところで、中島の方で土地が必要だってんで買収されたりしてね。ですから大沢ってところは農家にとっては天文台と中島と（筆者註：調布飛行場を含めて）、その三つのために本当に農業やれなくなった人が多いんですよ。……うちでは天文台は関係なかったんです。ただ中島飛行機製作所ね、キリスト教大学になっている所は土地をとられたんですよ。それでワサビは全部なくなっちゃったしね。現在家がある所の北側はほとんど買収されて。ずい分影響ありました。私なんか大東亜戦争に大分行ってまして、帰ってきたら家がそういう状態になっちゃっていたので、働く所もないし、本当に困っちゃったなあっていうのがありましたよね。<sup>45)</sup>

三軒家から深大寺（三鷹）に移転した竹内愛子からの聞き書き

移転には交換条件で代地をもらった。代地の広さとかで交渉が大変だった。反対して

も、中島研究所になって国の施設になって反対できなかつた。農家の移転は大変で、腐葉土から何から全部リヤカーで引っぱって持ってきた。しょうがない者は手車を頼んだりした。親戚が手伝ってくれた。食糧難だから、陸稲などは小屋にしまって、年寄りが泊りこみで見張ったりした。作物も一年はできないから、一時は買って食べたりした。移転するとき、金で支払うという話もあったが、百姓は土地がないとなにもできんといふので土地をもらった。……古い木や御獄山の石碑も持ってきた。<sup>46)</sup>

以上の聞き書きからは、意思に反して立ち退きまたは土地の売却をせざるをえなかつたこと<sup>47)</sup>、移転の難しさ、代替地の狭さ、生業であった農業に対する打撃が印象的である。

ただし当時の三鷹町町長・高橋勝義の次のような回想も存在する。

中島飛行機の工場が今の大沢という部落にありました。……買収になって、その日に高射砲部隊が大沢にできましたね。あれは買収の日は2ヶ所同日だったんですよ。そして片方は中島飛行機で、軍の命令で、予算はあるんだし、どんどん買って工場で、確定しなければ軍からしかられちゃうからね、まあいくらでも金出しちゃうわけで。町役場の2階と下で2組で片方は高射砲の軍隊ですから、将校連中が、長い刀さして来て、「特別に、値よくおまえたちののは買ってやるから、2円だ」なんて言いやがってね、坪2円ですよ、強制買収で。それで下でもって交渉しててね、中島飛行機は12円で買うでしょ、1/6で、2階で、取られて、下でもって、6倍で売れているわけなんだよ。<sup>48)</sup>

これによれば中島飛行機の土地買収の価格はすくなくとも安くはなかつたようである。

大沢の隣の集落・野崎の農民で元都立機械工業学校学徒からの聞き取り調査より

調布飛行場の土地の値段は坪80銭<sup>49)</sup>だった。中島飛行機は坪10円で買った。それでこのあたりの農民は「うちの土地も買ってくれ、買ってくれ」との騒ぎになった。飛行場に取られた人は貧乏になった。中島飛行機に買ってもらった人は金持ちになった<sup>50)</sup>。代替地を貰った人もいるし、金だけに代えた人もいた。小金井に代替地をもらった人は東小金井の駅ができて、また得をした。損をするか得をするかは運だ。大地主だったある人は、飛行場などに3度土地を取られてすっかり土地を失ってしまった。中島飛行機は地元の周旋屋を雇って土地の買収をおこなっていった。野崎の30m道路の向こう側（南側）もすっかり中島飛行機が買収した。寮をつくるという話で1軒ほど出来たが、終戦となった。買収後もその土地では畑作はずっと続けられていた。その後農地改革で土地は耕作者のものになったので、ここの土地の人達は、土地を中島飛行機に売った代金だけ、そっくり得をしたことになった。<sup>51)</sup>

次は川瀬スミ子からの聞き取り調査である。

何回も炉辺で火を囲んで竹内の人々が集まっていた。特にお年寄りは絶対反対だった。「竹内は団結して売らないようにしましょう」という話もあった。しかしまず島田さんが土地を売った。不動産屋のようなこともしていたので、移動するのも早かった。あちこちぼつぼつ売る人が出た。しっかり者だった本家の竹内勝義さんが竹内秀吉さんの家に来て「これはもう軍隊の仕事なのだから、いつまでもがんばっていても仕方ない」といったことを話した。何回も高橋三鷹町町長の家まで夜行って相談した。本家と分家といっしょにいいところを代替地にもらおうと話した。竹内秀吉さんは中島飛行機に対し「大沢から出たのだから大沢に土地をよこせ」と主張したりした。最後は竹内もばらばらだった。早く売った人もいたり、幸助さんはなかなか立ち退かなかったり。竹内梅吉家は井口の交差点に移転した。竹内幸吉家、竹内鉄之助家は三鷹の深大寺に移転した。

竹内秀吉家は昭和18年6月に小金井の東町に引っ越した。移転するとき大工もしていた秀吉さんはまったく新しいタイプの家の図面を書いたが、お祖母さんにいやだと言われ、怒って今までとまったく同じ形の家にした。暮らし向きは変わらなかった。

代替地はもともと多磨霊園近くに住む地主の小作地だった土地で、もう耕してあった。配給の肥料が少ないということはあったかもしれない。交通の便は、大沢は天文台通りに1時間に1本しかバスが来なかったのだが、小金井に移ったら駅が近くなったので良くなった。三軒家は暗くて夜は出にくかったが、こちらは明るい。また小作地の分も代替地をもらって私有地になったので、その分は所有する畑が増えた。それまで耕していた畑は4ヶ所にわかれていたが、それも1つにまとめてもらうことができた。秀吉家の代替地は1町、勝好家はその3倍ほどあった。ただ竹内幸助家は大きな地主だったので、それに代わるような代替地は貰えなかっただろう。どの家も引っ越した先は、高圧線の下だったり高圧線の鉄塔が立っている土地だった。そのような土地が余っていたのだろうか。

竹内秀吉家は建物の保証金や引越し代、立木についてのお金など合計すると5,500円ほど貰った。それをそっくり10年ものの保険のつく預金で郵便貯金に預けた。しかし10年後には満期になったが終戦後の経済の混乱でその価値はほとんどなくなってしまった。

小金井に移転してから、さらに中島飛行機は連雀通りの南45mのところまで敷地を拡張した。それで新築した家は2階屋で30坪ほどあったがまた移動した。当時「きりん」と呼んだジャッキで家を持ち上げ、その下に木の台を入れ、その下に入れた人力で台につけた縄を巻き取るようにして移動させる。親戚の子供も集まるところを後ろから前に移動させた。大沢の方から人夫が来たが、空襲警報が出ると帰ってしまうので時間がかかった。4-5日かかったと思う。

移転した家の2階に三鷹研究所の技術将校が下宿するようになった。サーベルを置き忘れるような人で、家の中では一緒にご飯を食べたり縁側に座ったりのんびりしていたが、外では威厳を保っており、その差が印象的だった。

私は三鷹第二小学校高等科を卒業した後、そこにあった青年学校に1年ほど行き裁縫などを習った後、女子挺身隊などで遠くにやられないように、森山別荘の管理人をしていた人に頼んで三鷹研究所に入れてもらった<sup>52)</sup>。軍需工場なのでここに入れば大丈夫と思った。昭和17年の春から夏ごろだったと思う。

こうしてみると先祖伝来の土地を手放したくないという思いに反し、農民が移転したり土地を売却しなければならなかったケースは、確かにいくつも存在したと思われる。ただし売却の条件は、中島飛行機が民間会社であり、さらに国家総動員法により資金が豊富であったため、調布飛行場の用地を買収した都や大沢高射砲陣地を買収した軍(国)に較べれば、かなり良かったのだろう。中島飛行機は代替地も用意した。ただし農家の移転にはたいへんな手間がかかったことは確かだろうし、大地主の場合は、それまで持っていたほどの面積の代替地は得られなかったということだろう。

そして土地を売却して人々が得た現金も、その時は高額と見えたものの、戦後の経済の混乱の中でほとんど価値がなくなってしまうこととなる。戦中・戦後を通して見れば、意に反して中島飛行機に土地を売却した人々は、精神面はもとより、代替地で補えなかった分の土地の代金については経済面においても、総力戦体制がとられた戦争による損害を受けたといえよう。

### c 神社の移転

清龍神社は1944年に現在地(大沢3-4)に移転した。また現在、大沢の八幡神社の境内社になっている天神は、もともと三軒家の北西の端にあったが、中島飛行機の土地買収により他に移り、さらに八幡神社境内に移った。同じ八幡社境内にある稲荷も天神と一緒に移動してきたとも言われる<sup>53)</sup>。

三軒家の各家の稲荷もそれぞれの代替地に移転した<sup>54)</sup>。

## 4. 建設

### 4.1. 地鎮祭

三鷹研究所の地鎮祭は1941年12月8日におこなわれた。偶然、真珠湾攻撃の日であった。

太田繁一からの聞き取り調査より

朝ラジオで開戦を知った。たいへんなことになったと思って朝食も早々に緊張して家

を飛び出した。地鎮祭は予定通り無事終了した。空に飛行機がたくさん飛んでいて爆音  
がものすごかったことを覚えている。社長や中島知久平先生は出席しなかったと思う。  
武蔵製作所や荻窪製作所の監督官は来ていたと思う。佐久間一郎さん（後に三鷹研究所  
建設部長）は出席していた<sup>55)</sup>。

佐久間一郎さんは開戦して間もないころ内々に「とんでもないところと戦争を始め  
た。ちょっと長引いたら負けだ」としみじみ言っていた。佐久間一郎さんはアメリカに  
出張していたことから、アメリカの国力なかならず航空機、自動車工業について精通し  
ていた。「アメリカなら板金加工やエンジンの組み立てを主体とする自動車工場を飛行  
機工場に振り向けることも容易だが、日本の場合は既存の設備を利用しようとするれば紡  
績工場を転換しなければならない。工場の建物自体はもとより、設備、機械、工具の経  
験、技能など何れも飛行機工場には不向きで転換しても急速な戦力の増強を期するこ  
とはできない」。そんなことを話してくれたこともある。<sup>56)</sup>

当時の三鷹町町長・高橋勝義

実際に当時はむちゃして、むちゃも通れば……ってことが、あれは本当にあてはまる  
言葉だと思うんですが、三鷹の中島飛行機の買収が済んで、じきに軍で、金を強制貸付  
して工場の拡張を命じますから、たちまちのうちに準備ができて、そうして地鎮祭を盛  
大にやったんです。それがまあ、陸軍だ海軍だなんて、軍の偉いのがいっぱい来やがっ  
て、私ども地元町長ですから、招待を受けて地鎮祭に行きました。行ったところが、  
将校連中の話じゃなくて、「どうだい君、すごいじゃないか。今日ははなばなくやっ  
たわなあ」なんてね。えらく兵隊連中、気持ちよかったようで。何をしたのかと思っ  
たら、12月8日だね、ハワイの真珠湾攻撃、あの出し抜けた朝でした。<sup>57)</sup>

以下は中島飛行機の技術者の感想である。

後に三鷹研究所発動機部門の責任者となる関根隆一郎

その朝遅れて参列された軍の人から日米の開戦を聞き知りいい表すことのできない衝  
撃に打たれたのであった。<sup>58)</sup>

太田製作所の陸軍機体設計部に属していた飯野優

昭和16年12月8日、三鷹の守（筆者註：森であろう）山荘の近くの武蔵野の雑木林  
の中で定礎の地鎮祭が行われる事になり、私達設計の担当者も、早朝太田を出て浅草に  
来た。奇しくも大東亜戦開戦の日であった。既に真珠湾攻撃のニュースは流れ、緊張感  
は異常に高まって、地鎮祭が了わるや否や直ちに太田に戻るべく浅草へ急いだ。<sup>59)</sup>

後に三鷹研究所試作部次長となった中川良一

太平洋戦争に突入した時に我々は直前に噂に聞いていたものの、全面戦争に突入と聞いた時に一同愕然且つ暗澹としたものである。というのは海軍機用としてハワイ攻撃に参加した主力の「栄」やその他「光」などの海軍向けエンジンは僅かに小さな荻窪工場で作っていたこと、戦争前にカーチスライトの技師が生産指導に来所してその能力を熟知していたこと、太平洋決戦機として海軍が試作をした「誉」は試作指示後僅か1年半でまだ海軍の耐久も終わっていなかったこと、協力工業のレベルの低いことなどで、全く勝ち味のないことが分かっていたからである。<sup>60)</sup>

#### 4.2. 三鷹研究所の設計計画

最初に三鷹研究所の施設の配置や道などの計画を作成したのは、1942年1月から1943年10月まで三鷹研究所建設部長を務めた佐久間一郎だろう<sup>61)</sup>。1942年末の段階では、三鷹研究所の組織は建設部のみであり、荻窪の東京製作所に三鷹研究所準備室が置かれた<sup>62)</sup>。

佐久間一郎が広大な敷地をどのように利用しようとしたのかは不明であるが、以下に推測を述べる。

完成した施設<sup>63)</sup>から見れば、現在のICU正門の位置に三鷹研究所の正門が設置され、そこから西に、現在マクリーン通りとなっている道が造られた。この道の南側の、現在の富士重工業東京事業所を中心とする地域は、発動機開発部門の敷地となった。この道のつきあたりにロータリーを設け、そこから南北に伸びる広い道が造られ、その西側は陸軍の機体開発部門の敷地となった。ロータリーから南に伸びる道は調布飛行場の滑走路に誘導路で連結された。

現在のマクリーン通りの北側は、実際には食堂・診療所・運輸部などが置かれたが、本来は海軍の機体開発部門の敷地にする計画だったという<sup>64)</sup>。

前述の中島知久平の「総合研究所」の構想を考慮すれば、彼により樹木の保存が命じられ、泰山荘付属の花畑<sup>65)</sup>もあった野川周辺は、研究者の散策の場となるはずだったのだろう。

以上は三鷹研究所設立の目的に沿ったもので、当初からの計画であろう。

現在野川公園となっている地域は、調布飛行場への巨大爆撃機の発着を可能にするため、調布飛行場の滑走路を延長することに使用される予定<sup>66)</sup>だったというが、設立当初からそのような計画があったのかどうかは不明である。

実際には農場として使用された是政線の西側、多磨霊園の北側の土地（現在は運転免許試験場・都立武蔵野公園になっている）は、三鷹研究所の中心部とは線路で隔てられているので、筆者の推測にすぎないが本来は関係者の住宅用の土地だったのではないか。

いずれにせよ当初の目的に沿った計画は未完成に終わることとなる。佐久間一郎は軍需省からの生産拡大の要請に応えるため、藤原銀次郎査察使の裁定により、武蔵野製作所と多摩

製作所とが合併して 1943 年 11 月に発足した武蔵製作所の所長に転任した<sup>67)</sup>。

### 4.3. 建物の設計・施工

三鷹研究所の建物の建築を担当したのは大倉土木（現、大成建設）である。大倉土木は 1925 年に東京製作所の建設を担当して以来、終戦まで 21 ヶ年にわたって中島飛行機の建設を担当した<sup>68)</sup>。「競争入札をしてもどうせ見積もりは不確かだし、談合も起こるだろう。それよりは特定の会社を信頼して全部任せる。ただし少しでも不正があれば出入り禁止」というのが中島知久平の方針だった。大倉土木には中島飛行機担当の重役がいたし、大倉土木の社員が中島飛行機の営繕課長になるといった具合で人事の交流は密だった<sup>69)</sup>。

大成建設には、三鷹研究所建築についての 19 件の工事経歴が残っていたようだが、どの工事が存在したどの施設のものは確定できない<sup>70)</sup>。

1942 年から三鷹研究所の設計主任となったのが大倉土木の、俳人「加倉井秋を」として著名な加倉井昭夫であった<sup>71)</sup>。

### 4.4. 資材の調達

西村忠雄からの聞き取り調査より

私は佐久間一郎取締役のもと、三鷹研究所建設のための資材係をつとめた。建設促進のため、資材の調達を急がねばならなかった。森山別荘で仕事をした。その大広間で会議もした。

資材を運ぶため、是政線からの引込み線を鉄道省の運輸課に言って作ってもらった。

当時資材はほとんど配給制だった。軍需省に書類を提出し切符を発行してもらう。それを配給公団に持っていくと、配給公団が、例えば鉄なら特約店を通じ日本製鉄・日本鋼管・川崎製鉄といった会社に生産を割り当てた。メーカーが生産すると、中島飛行機が各特約店に代金を払って資材を購入した。それを大倉土木に引き渡した。手続きだけで時間がかかる。

さらに鉄を作るためには例えば石炭が必要で、各メーカーはそのための切符も入手しなければならない。購入した資材を運搬するための貨車も、割り当てが決まっていた。そんな具合だから資材入手に時間がかかり、統制経済は理想的であっても実に不能率だと思った。

私は、三鷹研究所の建設を担当した大倉土木が出してくる建築計画に従って必要な資材を計算し、切符を入手するのに必要な書類を書いていった。そのために重なると数十センチにもなるほどの書類を徹夜で書いた。

セメントは重量だけを書けばいいので楽だったが、鉄材は、1つ1つの鉄材について規格の数値を書かなければならないので大変だった。特に三鷹研究所の工場は、大型機の製作のため『鉄のかたまり』のようなものだから手間がかかった。ただ必要とする鉄

材がなかなか入手できないので、入手できた鉄材から、細かな設計を変更して工事を進めてしまう場合もあった。

軍事に関する配給は最優先にする急速整備令という命令が出ており、三鷹研究所は最優先ということになってはいたが、1943年に入ると切符もなかなか発行されず、切符が発行されても資材が極端に入手しにくくなった。そこで陸軍の航空本部に行って、その担当官から特に斡旋をしてもらった。

セメントは小野田や浅野から買った。小野田セメントの工場は九州の津久見にもあった。関東にも秩父セメントがあるが、便利で買手が多く生産が間に合わなかったので、津久見からもセメントを運ぶことになった。ところが貨車が不足し、貨車を使っても物資不足なので誰かが途中でセメント袋を抜き取ってしまったこともあったようだ。それで機帆船を用意し、現地まで受け取りに行った。ところが帰路、瀬戸内海を航行中夜になり小島に停泊するのだが、女の子が小船で売春にやってくる。すると買う側は金がないのでセメント袋を渡してしまうこともあった。どこまで知らぬふりをするか困ったが、人夫の親方と談合し、ある程度は目をつぶるがこれだけは必ず届けるようにと話をつけた。

木材も大量に必要とされた。ただし1ヶ所に注文してもそれを運ぶ貨車はその地域では不足してなかなか手配できない。そこで全国のあちこちに分散して注文したら、それを運ぶ貨車も各地でうまく手配できて一気に入手することができた。ただし是政線は単線だったのでホームで貨車が混み合って困った。

工場の鉄筋コンクリートのための砂利は、福生の多摩川原砕石を使った。砂は鬼怒川、利根川の上流から小船で取り寄せた。花崗岩は茨城県から。ガラスや麦わらまで、全国各地に出向いてはありとあらゆる資材を調達した。

都市土木という会社の事務所も、三鷹研究所の敷地内の仮小屋にあった。大倉土木の下請けで道路を造っていた。そのための砕石も入手した。

#### 4.5. 建築に従事した人々

西村忠雄氏からの聞き取り調査より

作業は7時から始まったが、自分は朝4時から散歩がてら現場を回った。大倉土木の斎藤さん<sup>72)</sup>は工事の催促に来ていて困ったようだ。よく現場に出向いたので労務者とも仲良くなった。大倉土木やその下請けの飯場がたくさんあって労務者はそこで自炊していた。東北出身の人が多かったと思う。鍋釜かついで全国を回っているような人たちだった。朝鮮人はそれほど多くはなかったと思う。彼らをどうコントロールするかが問題だった。朝3時に自宅にそんな人が現れ、腹が減ったからなにか食べるものはないかと訴えられたこともあった。よく働いてもらうため、近くの農家からサツマイモやスイカを買って配ったり、焼酎を配った。

労務者のための米の配給も不足した。切符を持っていても配給公団のほうでももない。そこで農家から米を直接購入したりした。農家は米はすべて供出することになっていたが、1反5-6俵収穫できるところを4俵しか収穫できなかつたといつて、残りを公定価格より高く売つていたようだ。

当時の深大寺町会会長の妻からの聞き書き<sup>73)</sup>

飯場には方々から人が集まつてきた。この人達は布団や鍋釜を背負つて飯場から飯場へ渡り歩いてた。当時食料の配給を受けるためには、町内会長に書類を提出する必要がある。朝は6時頃から夕方は遅くまで深大寺の町内会長のところに証明書を貰いに来た。字の書けない人や朝鮮人が多く、手続きは多くは町内会長が代筆することが多かった。飯場では喧嘩の絶えまがなく、怪我をしては町内会長のところに証明書を取りにきて病人用の卵や牛乳の券を要求するので、その取扱には困つた。

なお大倉土木の下請けとして、三鷹に現存する土木業者や<sup>74)</sup>、コンクリートの出っ張りを手製のノミで削ることを専門とする九州から来た組も働いてたといふ<sup>75)</sup>。

飯場の場所は不明であるが、1944年10月16日陸軍撮影の航空写真(国土地理院蔵)を見ると、後にマクリーン通りとなる通りの北側に23棟ほどの小屋が集中して作られている。川瀬スミ子からの聞き取り調査によれば、「これは建設作業に従事する人たちの飯場であり、頭は小川さん<sup>76)</sup>という人だつた。あちこちで洗濯を干したり炊事をしてたが、地元の人が入れる雰囲気ではなかつた。飯場に親子で来てた人もいて父親は働き、母親は炊事をし、子供は三鷹第二国民学校に来てた。朝鮮人の生徒が学校でいじめられ、相手をなだめたこともあつた」。

さらに上記の航空写真によると、現在の「学園通り」を挟むようにして14棟ほどの小屋が集中して作られている。これも飯場的小屋のように見える。1942年6月撮影の航空写真をもとにして製作された地図を収録した清水靖夫編『多摩地形図』之潮、2004年、42頁にもすでに10棟が掲載されており、前述の飯場より早く作られたものと思われる。ただしこれについての証言はない。

なお「現在の三鷹消防署大沢出張所の北のあたりにも屋根も壁もトタンでできた粗末な飯場があつた。そこにいた人たちが三鷹研究所の外に出てくることはなかつたが、ほとんど朝鮮人のようだつた」との声もある<sup>77)</sup>。

#### 4.6. 工事の進展

川瀬スミ子氏からの聞き取り調査より

最初に引越した島田家を取り壊された後、その敷地に2階木造の中島飛行機の仮事務所ができた。そこに佐久間一郎も週に1度来てた。

もともとすすきの原っぱだった島田家の敷地の向かい側に、大倉土木の建設事務所が作られた。杭を打ってその上に板を渡したような簡単な建物だった。中島の仮事務所に近かったため、建物の中から声を掛け合って話しができた。

都市土木の事務所も作られた<sup>78)</sup>。道路建設の会社で、武蔵境駅前には資材置き場があった。佐久間一郎もよく出向いた。

森山別荘の母屋は将校の接待などに使われていた。私たち事務員は配膳などを手伝わされた。後に森山別荘の母屋は、今のマクリーン通りにあたる道が拡張されることになったため、ロータリーの近くに移された。

三鷹研究所設計部長（機体開発部門）・青木邦弘の回想記より

日米開戦と同じ日に鉄入れの式が行なわれ、約2年を経た昭和18年秋には、まだ武蔵野の名残りをとどめ人家が四、五軒点在する中に、木造二階建ての建設事務所が棟ポツリと建っているだけであった。われわれは、とりあえずその二階に陣取って仕事を開始した。

……工場建設の方はわれわれの進出に刺激されてか、一段と活発になってきた。われわれは、設計本館のコンクリート打ちやスパンが50メートルを超える巨大な組立工場の梁が、一本づつ組み上げられていくのを眺めながら仕事を続けた。そして年を越えた春ごろ、まず鉄筋三階建ての設計本館が完成して、われわれはそこに移った。これに続いて組立工場も完成し、試作工場の大部隊をはじめそれぞれの部門が移転してきて、ようやく活況を呈してきた。昭和19年もようやく初夏を迎えようとするころであった。<sup>79)</sup>

ただし都立機械工業学校の学徒が入所した1944年4月には、発動機試作工場も南北2つに分かれているうちの北側はすでに完成しており、機械が稼動していたという<sup>80)</sup>。その時は青木邦弘の回想記にもあるように、まだ機体開発部門の格納庫（組立工場）は完成しておらず、三鷹研究所で完成することになる試作機・キ87のモックアップ（実物大の木製模型）も発動機試作工場に置かれていたという<sup>81)</sup>。

発動機試作工場には、稼動を急ぐあまり建物が完成する前に機械が運び込まれたため、トイレの工事ができなくなった所があり、外のバラックの中に作ったトイレも使用したという。また鉄筋ではなく木や竹を芯にコンクリートを流した部分もあり、床にも薄くて重い機械が置けない部分もあったという。掃除をすると十分固まっていないコンクリートがポロポロ落ちた<sup>82)</sup>。

格納庫は、1944年5月に都立機械工業学校の学徒が配属されたときはまだ工事が続いており、真っ赤に熱したボルトを作業員がヤットコにはさんで天井に投げ上げ、それを上にいる作業員が受け止めてボルトを締めていた。その腕力と手際の見事さに学徒たちは感嘆した<sup>83)</sup>。

こうして 1944 年初夏には、発動機試作工場・設計本館（研究本館とも呼ばれた）・格納庫という三鷹研究所の中心となった建物はようやくすべて稼働を始めた。しかしすでに日本の敗戦が決定的となるサイパン島陥落も、目前に迫っていたのである。それでも諸施設の工事は疎開が本格化する 1945 年の初めまで続けられることとなる。

## 5. おわりに

三鷹研究所の設立の経緯を辿ってみると、日中戦争下、政府の航空戦力拡大の意図に基づき、多摩地区の地価の安さ・工場の未進出・交通網の発達などを前提として、陸軍の関与による調布飛行場の建設・中島知久平の武蔵野製作所を中心とする軍需工業地帯の構想が重なり、彼個人の強い意向を反映した壮大な総合研究所が三鷹に計画されたといえよう。当時の日本において最先端の発動機工場の知識を持っていた佐久間一郎の、この地域に対する関与も大きかった。

その結果、調布飛行場、三鷹研究所など中島飛行機の諸施設、三鷹研究所と同様に調布飛行場を利用する計画だった中央航空研究所の建設に伴い、この地域では多くの住民が「お国のために」直接・間接など程度の差はあったのだが強権的に立ち退かされることとなった。総力戦体制が地域に及ぼした影響といえよう。

現在その跡地は様々な経緯をへて、その広大さを利用した学校・研究所・工場・公園・集合住宅などになっている<sup>84)</sup>。総力戦体制が結果的に戦後の都市開発を促進したともいえようが、戦時中におこなわれた土地集積の問題性を想起することもできるだろう。それは今の諸施設やその土地利用の「公共性」を改めて問うことにも繋がるだろう。

次回・次々回では、三鷹研究所の稼働期、三鷹研究所の疎開・終焉を扱う予定である。

## 注

- 1) 川瀬（旧姓竹内）スミ子は 1926 年生まれ。三軒家在住だった竹内秀吉の長女。三鷹第二国民学校高等科卒業後、青年学校を経て 1942 年から三鷹研究所に勤務。2002 年 8 月 14 日、主に川瀬スミ子と、その妹である須藤（旧姓竹内）喜美子（1928 年生まれ）・小森（旧姓竹内）英子（1933 年生まれ）から聞き取り調査（面接）をおこなった。2002 年 9 月 7 日・2005 年 1 月 21 日にも川瀬スミ子から聞き取り調査（面接）をおこなった。以下、川瀬スミ子からの聞き取り調査として記述する文章は、上記の聞き取り調査を筆者が要約し、3 人に確認していただいたものである。なお川瀬スミ子からは中島飛行機の従業員が撮影したという、三軒家・三鷹研究所関係の写真 13 枚を提供していただいた。
- 2) 太田繁一は 1912 年生まれ。1938 年に東大法学部を卒業し、技術職には大勢大卒者を採用していたが、事務職には大卒者は採用しなかった中島飛行機初の大卒の事務職として入社。社長秘書や三鷹研究所など各地の中島飛行機の用地買収を担当。太田繁一から 2002 年 7 月 16 日に面接により、2002 年 12 月 14 日には電話により聞き取り調査をおこなった。その後筆者が聞き取り調査をまとめた文章を、2006 年 8 月 20 日に本人に加筆・訂正していただいた。以下、太田繁一からの聞き取り調査として記述する文章は、この文章からの引用である。

- 3) 西村忠雄は1914年生まれ。早稲田大学専門部政治経済科を卒業し、学校からの推薦で中島飛行機の入社試験を受け、1941年4月入社。最初は太田製作所庶務課に勤務し、1942年3月三鷹研究所に転勤した。建築資材の調達を担当し、後に企画課係長として機体開発部門の東北疎開を担当。西村忠雄からは2002年4月15日・2002年5月3日・2004年11月13日、聞き取り調査（面接）をおこなった。その後筆者が聞き取り調査をまとめた文章を、2006年8月15日に本人に加筆・訂正していただいた。以下、西村忠雄からの聞き取り調査として記述する文章は、この文章からの引用である。
- 4) 井之口章次編『三鷹の民俗2 大沢』三鷹市教育委員会・三鷹市文化財専門委員会、1981年、14-15頁、三鷹市編纂委員会『三鷹市史』三鷹市、1970年、269, 277頁。
- 5) この辺りではケヤキに加え、冬の季節風や夏の台風に対してシラカシを列植して高い垣根にするのが一般的であった。「昔は家の構造も簡単ただだけに常緑樹と落葉樹を組合わせた屋敷林は防風、防寒、防砂、防火などの作用があり重要な役割を果たして来た」（『西三鷹むかしむかし』井口地区住民協議会、1983年、199頁）。
- 6) 村越知世『多摩霊園』郷学舎、1981年、25頁。
- 7) 宍戸幸七『三鷹の歴史』けやき出版、2006年、130-132頁、前掲『三鷹の民俗2 大沢』13頁。
- 8) 野田正徳ほか編『多摩の鉄道百年』日本経済評論社、1993年、98頁。
- 9) ヘンリー・スミス『泰山荘』ICU湯浅八郎記念館、1993年。
- 10) 森山別荘については富士重工業東京事業所「森山荘の由来」1994年。建設された年代は川瀬スミ子からの聞き取り調査による。森山別荘については本稿3.2.aの太田繁一からの聞き取り調査も参考になる。森山別荘の母屋は中島飛行機が買収した後、現在のマクリーン通りにあたる三鷹研究所内の道を造るために現在の大学本部棟のあたりに移されたことが、陸軍が1941年7月4日・1944年10月16日に撮影した航空写真（国土地理院蔵）からわかる。そして戦後ICUが買収した時に、富士重工東京事業所の中に移され、現在に至るまで「森山荘」として保存・使用されている。
- 11) 富永親徳は1896年熊本県生まれ。東京美術学校西洋画科卒。帝展に出品。住所は三鷹村上石原2172（『日本美術年鑑 昭和11年度』美術日報社、181頁）。
- 12) 前掲『三鷹の歴史』159頁には次のような記述がみられる。「大正14年になると……本郷富士前の帝国商事株式会社によって大沢上石原2丁目（現在国際基督教大学内）に松寿園分譲地……が発売された。……坪7円で地主より買収し分譲価格は10円位であった。これらの土地は一部売り切れず、結局昭和の大恐慌により坪1円位まで下落する」。志賀直哉の弟（直三）の別邸があったことについては川瀬スミ子からの聞き取り調査・1987年10月29日ICU職員・磯貝勝太郎によるICU近隣の住民・菅原壽卿からの聞き取り調査（ICU図書館蔵）による。
- 13) 前掲『多摩の鉄道百年』74-80頁。
- 14) 朴慶植『多摩川と在日朝鮮人』ムルレの会、1984年、37頁。
- 15) 『鉄道ピクトリアル』2002年4月号（No. 716）、鉄道図書刊行会、232頁。星野進一『小金井百一話』小金井新聞社、1980年、85頁。
- 16) 小田急バス株式会社社史編纂委員会『小田急バス40年史』同社、1991年、3-4頁。
- 17) 調布飛行場については、東京都府中市多磨町会『多磨町の歴史』同町会、1992年、山本豊「調布飛行場の歴史」（『調布史談会誌』第26号、1997年1月）、櫻井隆『陸軍飛行第244戦隊史』そうぶん社、1995年。
- 18) 中央航空研究所については、航空局五十周年記念事業実行委員会『航空局五十年の歩み』同委員

会、1970年、179頁、日本航空学術史編集委員会『日本航空学術史(1910-1945)』同委員会、1990年、291-299頁、船舶技術研究所『船舶技術研究五十年』同研究所、1966年、20-23頁。『船舶技術研究五十年』に記載されている、立ち退いた「教会」が聖ジョセフ修練院(修練院はカソリックの修道士養成施設)であることは、2006年6月8日男子マリア会からの聞き取り調査(電話)による。

- 19) 加藤勇『佐久間一郎伝』佐久間一郎刊行会、1977年、262頁。
- 20) 川村善二郎ほか編『戦時下の我が町三鷹』三鷹市社会教育委員会、1983年、45頁。
- 21) 詳しくは前掲『三鷹市史』469-471頁。なお同書では三鷹航空工業の創業は1933年となっているが、前掲『三鷹の歴史』202頁および北尾亀男編著『昭和十六・七年航空年鑑』大日本飛行協会、1943年、400頁によれば、1936年である。正田飛行機・三鷹航空工業については牛田守彦・高柳昌久『戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版』ぶんしん出版、2006年、139-140頁を参照。
- 22) 渡邊秀樹・樽永編『知られざる軍都多摩・武蔵野』洋泉社、2005年、92頁。立川飛行場が軍需専用とされたことを重要視するのが、多摩の交通と都市形成史研究会『多摩鉄道とまちづくりのあゆみⅠ』東京市町村自治調査会、1995年、177-179頁。
- 23) 前掲『戦時下の我が町三鷹』14, 55頁。
- 24) 貝塚爽平監修・清水靖夫編『明治前期・昭和前期東京都市地図2 東京北部』柏書房、1996年、190-191頁。
- 25) 注1を参照。
- 26) 現在も深大寺公園のこぶしの幹の北側に埋め込まれている鉄の輪は、屠場があった頃牛をつないだものである。2005年2月10日深大寺(三鷹)で生まれ育った住民(1926年生まれ)からの聞き取り調査(面接)より。
- 27) 1941年5月端午の節句に撮影された竹内秀吉家の母屋の写真は、前掲『戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版』117頁に掲載されている。
- 28) 1942年6月の空中写真をもとにした清水靖夫編『多摩地形図』之潮、2004年、41頁「多磨墓地東部」には、この稲荷と思われる神社が記載されている。
- 29) 清龍権現(二塚神社)。前掲『三鷹の民俗2 大沢』117-118頁に記述がある。
- 30) 三軒家の稲荷については前掲『三鷹の民俗2 大沢』134頁に記述がある。
- 31) 前掲『三鷹の民俗2 大沢』88, 109頁。
- 32) 太田繁一からの聞き取り調査、山田誠『最後の特攻機剣』大陸書房、1974年、106頁に掲載されている、元三鷹研究所設計部長・青木邦弘からの聞き書きより。ただし鈴木五郎『不滅の戦闘機疾風』光人社、2007年、182頁には次のような記述がある。「対英米戦争を指向した陸軍が、中島に陸軍機およびエンジンに関する総合研究試作施設の建設を指示してきたので、東京都下三鷹に三鷹研究所を設けることになった。」これが正しいとすれば三鷹研究所は当初から陸軍機開発のための施設であり、しかも中島飛行機独自の発案ではなく軍命によるもの、ということになる。なお中島飛行機に勤務していた朽木久尚「中島飛行機株式会社のあらまし」富士重工業群馬製作所蔵、年代不詳、43頁は、三鷹研究所は対米戦争を予想していた中島知久平が、アメリカに劣らない飛行機を設計するための研究所として設立したもの、とする。
- 33) 富士重工業株式会社社史編纂委員会『富士重工業三十年史』富士重工業株式会社、1984年、36頁には次のような記述がある。「太平洋戦争の開戦や終結時にも明らかとなり、陸海軍の意見の不一致、主導権争いは、中島飛行機を悩ませた。……中島の被害は、陸海軍がそれぞれの工場

の分立を競い合ったこと、設計陣を二本立てにしたことに表れている。昭和 16 年 12 月中島飛行機は、三鷹に総合研究所を建設するが、陸海軍の開発上の歩み寄りのみならず、機体関係の開発は最後まで別個に運営されていた。しかし太田繁一からの聞き取り調査によれば、「生産部門においては武蔵野製作所と多摩製作所の経緯に見られるような陸海軍対立の影響があったかもしれないが、開発部門においては発動機開発部門で事実上陸海軍のエンジン開発を同じ組織がおこなっていたことに見られる通り、そのようなことはなかった。機体開発において陸軍部門と海軍部門が分かれていたのは、それぞれの飛行機の性格が違うからという理由による。ただしエンジン開発部門と機体開発部門が違う場所にあるのは飛行機の開発上不都合だったので、三鷹研究所はその解決を狙ったものである。なお全くの推測であるが、海軍機体開発部門が三鷹研究所に移転しなかったのは空襲が迫っていたこと・移転の煩雑さなどが理由ではないか。ただし 2003 年 1 月 27 日 元三鷹研究所発動機試作工場長からの聞き取り（面接）によれば、三鷹研究所の発動機試作工場が南北に分かれているのは、陸軍と海軍が不和だったため実施はされなかったが試作の場も分けるためだったという。これが事実なら発動機開発部門でも陸海軍の対立はあったことになる。なお、中島飛行機の組織の変遷については片淵須直「中島飛行機設計部の組織とシステム」（歴史群像編集部『四式戦闘機疾風』学習研究社、2004 年）。

- 34) 碓義朗『さらば空中戦艦富嶽』光人社、2002 年、210 頁によれば、防空司令部からの調布飛行場に離着陸する飛行機に三鷹研究所の松の木が邪魔だから伐れとの命令に対しても、中島知久平は松の移植をさせたとのことである。なおその作業を請け負った府中市多磨町の造園業者・村越惣十郎からの聞き書きが前掲『いま語り伝えたいこと』257-258 頁に収録されている。
- 35) 太田繁一からの聞き取り調査による。なお中島知久平の総合研究所としての三鷹研究所の構想については富士重工業群馬製作所『中島知久平顕彰記念冊子』同製作所、1998 年、25 頁にも同趣旨の太田繁一の文章が掲載されている。
- 36) 発動機開発がおこなわれていた荻窪の東京製作所（1943 年に荻窪製作所と改称）と、日本最大の航空機用発動機工場だった武蔵製作所（武蔵野製作所と多摩製作所が 1943 年に統合されたもの）とは青梅街道で繋がっていた。後に武蔵製作所は田無の中島航空金属（エンジンの鋳物部品を製造）とも軽便鉄道で連結された。この武蔵製作所には、南下して武蔵境駅の北に繋がる引込み線が作られていた。三鷹研究所にも、武蔵境駅の南に繋がる是政線の新小金井駅付近から分岐する引き込み線が作られた（前掲『戦争の記憶を武蔵野にたずねて』14, 68-69, 98-99, 112 頁）。
- 37) 前掲『富士重工業三十年史』40 頁。ここには「三鷹研究所配置図」も掲載されている。太田繁一からの聞き取り調査によれば 62 万坪。
- 38) 前掲『富士重工業三十年史』40 頁。
- 39) 武田清子『未来をきり拓く大学』国際基督教大学出版局、2000 年、67 頁。これには ICU がその後売却した都立武蔵野公園・警視庁運転免許試験場・都立野川公園・アメリカンスクールインジャパン・東京神学大学・ルーテル学院大学などの敷地が含まれる。
- 40) 本稿 3.2.b の川瀬スミ子からの聞き取り調査、野崎の農民からの聞き取り調査より。なお、戦後持株会社整理委員会に中島飛行機の後身である富士産業が提出した文章には、「三鷹工場」関係の土地として 79 万坪という数字が見られる（国立公文書館所蔵、持株会社整理委員会文章、リール 0324 コマ 657）。ただしこの土地は中央線沿線の広い範囲に点在しており、武蔵製作所・荻窪製作所などのこの近辺の中島飛行機所有の土地が「三鷹工場」の土地として区分し直された結果かもしれない。
- 41) 渡部一英『日本の飛行機王 中島知久平』光人社、1997 年、328 頁によれば、中島飛行機は相

次ぐ大拡張のため資金の調達は困難視されるに至ったが、「実際には国家総動員法の第三条第三項の発動により、政府保証の強制貸付金を興銀から借りうけられるようになったので少しも困らなかつた」。

- 42) 調布の大地主・中村家の屋号（太平洋戦争と調布編集委員会『太平洋戦争と調布』調布史談会、2004年、7頁）。
- 43) 2006年9月2日の太田繁一からの聞き取り調査（電話）によれば、土地を借りる場合はその土地を売却した代金を定期預金に預けた場合の利子分（当時は年6%ほど）を、借地代として支払っていたという。これに基づけば竹内幸助の土地は坪83銭となり、太田繁一からの聞き取り調査（本稿3.2.a）からすると安すぎることになる。「坪5銭」は月額であろうか。しかしそう仮定すると竹内幸助の土地の値段は坪10円と推定され、畑としては高すぎると思われる。ただし前掲『三鷹の歴史』213頁にも「三鷹研究所が設立される。買取価格は坪10円」とある。ちなみに2002年8月22日龍源寺の方（1924年生まれ）からの聞き取り調査（面接）によれば、戦時中龍源寺はICUの裏門付近に持っていたすいか畑などの1,000坪ほどの土地を中島飛行機に貸し、その地代が年額450円ほどで良い収入になっていたという（ただし太田繁一によれば「年額450円」は畑としては高すぎるとのこと）。
- 44) 前掲『いま語り伝えたいこと』243-245頁。前掲『三鷹の民俗2 大沢』15頁にも竹内幸助のこの土地についての聞き書きが収録されている。
- 45) 前掲『三鷹の民俗2 大沢』184-185頁。
- 46) 井之口章次編『三鷹の民俗3 深大寺』三鷹市教育委員会、1982年、14頁。
- 47) ICU社会科学科生川口茜が2007年6月に提出した卒業論文「三鷹市大沢の自然と記憶：大沢での土地買収における人々の語り」15頁によれば、三軒家のある家は交渉を避けるために度々居留守を使ったが、中島飛行機の交渉人が土地取用法を使うと脅かし始めたために、最終的に転居を決めたという。
- 48) 前掲『戦時下の我が町三鷹』15頁より要約。
- 49) 本稿2.2.cに示した価格や当時の相場からすると安すぎると思われる。ただし調布飛行場のため土地を買収された峰岸清からの聞き書きによれば、その時の買取価格は「1反250円」で、これは1坪約83銭となる（三鷹市教育委員会『水車屋ぐらし』同委員会、2000年、53頁）。
- 50) 関連して、2002年9月19日大沢在住の元農民（1911年生まれ）からの聞き取り調査（面接）の内容を述べる。この元農民は調布飛行場の敷地買収により移転し、さらにその代替地を中島飛行機によって一部買収された経験を持つ。「調布飛行場の敷地買収の時は都が買収するというところで、支払われたのは農地（坪3円30銭から2円80銭）や住宅、立木の補償金のみであり、代替地や建物の移転の世話はなかつた。この時は不動産屋が動くことにより周辺の地価が上昇し、前の農地の補償金を当てても農地が十分に買えず、専業で農業をすることは難しくなった。しかし中島飛行機の場合は民間企業ということで、代替地や建物の移転の世話の中島側がおこなった」。
- 51) 2003年8月22日野崎の農民であり、三鷹研究所に動員された元都立機械工業学校学徒（1928年生まれ）からの聞き取り（面接）。
- 52) 近所の農家の人のなかには週日には制服をきて守衛として勤務する人もいたという（前掲『三鷹の民俗2 大沢』14頁）。
- 53) 前掲『三鷹の民俗2 大沢』117-118頁。
- 54) 前掲『三鷹の民俗2 大沢』134頁には竹内幸助家、芳須緑『小金井風土記』小金井新聞社、

1983年、75頁には竹内勝義家の移転後の稲荷についての記述がある。

- 55) 前掲『佐久間一郎伝』152頁によれば、中島知久平は日米開戦の知らせを受け「これで日本はダメだ……」と洩らしたという。しかし最近の研究である高橋泰隆『中島知久平』日本経済評論社、2003年、234頁によれば、中島知久平は1942年8月までは事態を楽観視しており、アメリカ本土も日本が領有する「夢想」を抱いていたという。なお、前間孝則『富嶽一米本土を爆撃せよ』講談社、1991年、201-207頁には、この地鎮祭に出席した者を含む、中島飛行機の技術者たちの日米開戦に対する感想が書かれている。
- 56) なお、その後太田繁一は地鎮祭の後は三鷹を離れ、本社で秘書と人事の仕事を担当するとともに浜松、三島、四日市、松阪等の各地に工場を新設するため必要な土地の買収に奔走したという(太田繁一からの聞き取り調査より)。
- 57) 前掲『戦時下の我が町三鷹』16頁。
- 58) 関根隆一郎「中島飛行機発動機20年史」(『航空情報』1955年8月号、酣燈社)33頁。当時関根隆一郎は荻窪の東京製作所に勤務。
- 59) 宇都宮中島会編集委員会『飛翔の詩』宇都宮中島会、1989年、100頁。
- 60) 中川良一・水谷総太郎『中島飛行機エンジン史』増補新装版、酣燈社、1992年、267頁。ただし中川良一がこの地鎮祭に出席していたかどうかは不明。
- 61) 太田繁一からの聞き取り調査より。佐久間一郎は中島飛行機の「元老」と呼ばれた人物である。彼は1938年に完成した陸軍の発動機工場である中島飛行機武蔵野製作所に、日本で初めてフォードシステムの流れ作業を導入した。地下には総延長7kmにおよぶ地下道があり、この工場では従業員は建物から建物へ、地下道を通して移動した。移動の能率を上げ、地上には車を走らせるためである。また鉄の削り屑も圧搾空気で集められて地下に落とされ、電気トロッコが集める仕組みになっていた。続いて彼は1941年に完成した海軍の発動機工場である多摩製作所の建設を指導したが、海軍から、陸軍の発動機を作っている者が口出ししないでくれと言われ、中島知久平が陸軍の確執に佐久間が巻き込まれるのを避け、彼を三鷹研究所の担当としたという(前掲『富士重工業30年史』31-32頁、前掲『佐久間一郎伝』150頁)。
- 62) 前掲『富士重工業30年史』37頁。
- 63) 詳しくは次回の研究ノートで示す予定である。
- 64) 西村忠雄からの聞き取り調査による。太田繁一からの聞き取り調査によれば、「具体的な場所は知らないが海軍機体開発部門のための敷地が確保されていたことは確か」である。
- 65) 野川の南側には泰山荘建築当初からの付属の大きな花壇があり(国土地理院所蔵、1941年7月4日撮影の陸軍航空写真で確認できる)、中島飛行機買収後も専従の職員が付き、農業を専門とする学校の教員も関わって手入れされていたという(2002年9月20日地元の住民であり三鷹研究所に動員された元三鷹第二国民学校学徒(1931年度生まれ)からの聞き取り調査(面接)より)。
- 66) 前掲『陸軍飛行第244戦隊史』258頁。
- 67) 前掲『富士重工業30年史』38-39頁。
- 68) 社史発行準備委員会『大成建設社史』大成建設株式会社、1963年、277-278頁、年表12頁。
- 69) 太田繁一からの聞き取り調査より。
- 70) 大成建設2003年8月4日調べ。ただし、2008年2月時点、原本は所在不明。
- |                         |                    |            |
|-------------------------|--------------------|------------|
| 1. S16.10.14 - 16.12.31 | 三鷹研究所新設工事の内機体研究場建築 | 920,000円   |
| 2. S17.5.25 - 着後1年半     | 同所試作実験室工事          | 1,124,800円 |
| 3. S17.5.25 - 〃 2ヶ月     | 同所機体工場衛生空気管工事      | 346,900円   |

- |     |           |   |   |          |                    |            |
|-----|-----------|---|---|----------|--------------------|------------|
| 4.  | S17.5.26  | - | 〃 | 8ヶ月      | 同所木造本館其他工事         | 303,600円   |
| 5.  | S17.5.28  | - | 〃 | 1年半      | 同所一本館新築工事          | 426,600円   |
| 6.  | S17.6.9   | - | 〃 | 8ヶ月      | 同所研究場工事            | 145,700円   |
| 7.  | S17.9.7   | - | 〃 | 15ヶ月     | 同所作業所新築            | 1,638,000円 |
| 8.  | S18.8.16  | - |   | 19.6.15  | 同所総務本館新築           | 736,800円   |
| 9.  | S18.      |   |   | 不明       | 同所試作実験室設備工事        | 125,800円   |
| 10. | S19.6.7   | - |   | 19.10.10 | 同所板金工作室工事          | 865,000円   |
| 11. | S19.6.29  | - |   | 19.8.31  | 同所風洞模型室新築          | 339,700円   |
| 12. | S19.7.18  | - |   | 19.9.30  | 同所実験室工事            | 656,100円   |
| 13. | S19.9.28  | - |   | 19.10.31 | 同所第二回設計変更          | 112,700円   |
| 14. | S19.9.1   | - |   | 19.11.10 | 同所試作実験室防空暗幕及び遮光幕工事 | 109,500円   |
| 15. | S19.7.18  | - |   | 19.9.30  | 同所研究室油質実験室工事       | 656,100円   |
| 16. | S19.11.6  | - |   | 着後3ヶ月    | 同所機籾室厨房及び煙突煙道工事    | 364,200円   |
| 17. | S19.12.6  | - | 〃 | 2ヶ月      | 同所設計変更工事           | 233,300円   |
| 18. | S19.12.16 | - | 〃 | 〃        | 同所元倉庫工事            | 272,700円   |
| 19. | S20.3.31  | - | 〃 | 3ヶ月      | 同所厨房設備工事           | 373,800円   |
- 71) 高橋謙次郎編著『昭和俳句文学アルバム 10 加倉井秋をの世界』梅里書房、1992年、9頁。加倉井昭夫（1909年生まれ）はこの仕事で多忙を極めたため句誌『若葉』の編集長を譲り、1944年には現場近くの武蔵野市境南町に転居した。1945年4月には大倉土木を退社し、第一軍需工廠（中島飛行機が国有化された後の名称）の五日市支廠建築課長となった。1972年からは武蔵大学人文学部教授・三鷹市文化財保護委員を務めた。なお加倉井は戦後次のように語っている。「上野の美術学校を卒業して建築デザインに従事する私に、それだけでは満たし得ない表現意欲が、こうして俳句という詩によって私は埋めて行けたのであった。……これは、あのいやな戦争のため、明けても暮れても工場や格納庫、地下工場などの設計ばかりの仕事であったため、もし戦争がなく今日のような建築設計が充分にできたら、この時期にこんなにムキになって作句はせず今ごろは本来の建築家を貫き通して、俳句とはもっと遠ざかっていたかも知れません」（加倉井秋を・三谷昭『現代俳句講義録』第1巻、俳句研究社、1976年、12頁）。
- 72) 前掲『大成建設社史』278頁に中島飛行機施設の現場責任者として「斎藤文一郎」とある。前掲『佐久間一郎伝』144頁によれば武蔵野製作所の建設も担当した。
- 73) この文章は、筆者が前掲『いま語り伝えたいこと』157-159頁に掲載されている黒川田鶴子の文章を要約し、黒川田鶴子の筆者宛の手紙（2002年7月26日）の内容を加えたもの。ただし黒川田鶴子によればこれらは本人の直接の見聞ではなく、すべて深大寺町内会長の妻であった義母から聞いた話とのことである。
- 74) 2003年8月22日野崎の農民であり、三鷹研究所に動員された元都立機械工業学校学徒（1928年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。
- 75) 2002年11月25日元三鷹研究所守衛（1916年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。
- 76) 前掲『いま語り伝えたいこと』177頁には、三鷹研究所の建設に従事していた「人夫頭の小川さん」の話が掲載されている。同一人物であるかどうかは不明。
- 77) 2003年8月22日野崎の農民であり、三鷹研究所に動員された元都立機械工業学校学徒（1928年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。2003年1月27日、元三鷹研究所発動機試作工場長からの聞き取り（面接）によれば、発動機試作工場の東側の大きな建物が、大倉土木の飯場だ

ったという。2人の記憶は一致している可能性がある。

- 78) 位置は前掲の地図の7と9の間。川瀬スミ子によれば、前掲『多摩地形図』42頁にはその建物が掲載されているという。
- 79) 青木邦弘『中島戦闘機設計者の回想』光人社、1999年、170-171頁。
- 80) 2002年11月18日発動機試作工場に配属された元都立機械工業学校学徒（1928年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。
- 81) 2002年4月27日機体開発部門に配属された元都立機械工業学校学徒（1929年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。
- 82) 2002年8月10日発動機工場2階でカムの設計にあたった元従業員（生年不詳）からの聞き取り調査（電話）より。
- 83) 2006年9月28日機体開発部門に配属された元都立機械工業学校学徒（1928年生まれ）からの聞き取り調査（面接）より。また2002年4月27日機体開発部門に配属された元都立機械工業学校学徒（1929年生まれ）からの聞き取り調査（面接）によれば、格納庫は稼動後もスレート葺の屋根の工事が続いており、大倉土木の作業員の1人が落下して死亡する事故があったという。
- 84) この地域にあった軍事関連施設の跡地利用の現状については、前掲『戦争の記憶を武蔵野にたずねて 増補版』に詳しく記述した。